様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１２５０

研究課題名（和文）ペルシア語歴史物語の生成、伝播、受容に関する学際的研究

研究課題名（英文）Creation, Transmission, and Reception of Persian Historical Legends

研究代表者
近藤　信彰（Kondo, Nobuaki）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：９０２７４９９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では『ハムザ物語』や『アレクサンドロス物語』、『王書』のようなペルシア語歴史物語がどのように生まれ、他の地域にどのように伝播し、その地域でどのように受容されたかを明らかにした。これらの物語は古代の伝承に基づくとともに程度の違いはあれ、イスラーム化していて、成立にはアラビア語も大きな役割を果たしている。伝播に関しては講釈など口誦文化が重要で、書物だけではなく、講釈師たちの移動が物語の伝播に寄与した。受容に関しては東南アジアがより顕著な例を示し、ペルシア語からの翻訳のほか、自由に物語を膨らませた独自の版もあって、自文化のなかにしっかりと取り込んでいるさまが観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文学研究は伝統的に国家単位、言語単位で行われてきたが、ペルシア語歴史物語を扱った本研究により、前近代、ヨーロッパ到達以前のアジアの諸言語・諸地域の間に文学を通じた文化の交流があり、主人公やプロットなどが伝播していく一方、それぞれ言語・地域で独自の発展があることが明らかとなった。特に『ハムザ物語』や『アレクサンドロス物語』の東南アジアにおけるあり方は、当時のグローバルとローカルの文化のあり方を示している。いわゆるグローバル化が大航海時代と組み合わされて論じられる場合が多いが、ヨーロッパを介さず、軍事征服をともなわなくても、生み出された交流のあり方は、世界の成り立ちを考える上で示唆に富む。

研究成果の概要（英文）：This study explored how Persian historical romances such as "The romance of Hamza", "The Alexander Romance" and "The Book of Kings" were created, how they spread to other regions, and how they were accepted in those regions. These tales are based on ancient traditions and, to certain extents, have been Islamized, and Arabic language also played a major role in their creation. Oral culture, such as storytelling, played an important role in the spread of the tales, and not only the movement of books but also the migration of storytellers contributed to the spread of the romances. Southeast Asia showed more notable examples of acceptance, where in addition to translations from Persian, there were also original versions that freely expanded the tales, and it was observed that the romances were firmly incorporated into their own culture.

研究分野：ペルシア語文化圏史

キーワード：ペルシア語歴史物語　王書　アレクサンドロス物語　ハムザ物語　東南アジア　西アジア　南アジア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

グローバル化時代を迎え、さまざまな学問分野で、一つの地域にとどまらない現象に対する関心が高まってきており、ペルシア語歴史物語は、文化史・文学分野におけるこうした現象の一つとして考察できるテーマであると考えた。中東の文学としては『アラビアンナイト』が最も有名であるが、それはヨーロッパとの交渉のなかで発見され、流行した、いわばオリエンタリズムと深く結びついた作品である。近代以前に中東・西アジアで物語文学についての研究となると極めて限られており、当時の民衆がどのような作品を読み、どのような語り物を聞いていたのかについてすら十分な知識がなかった。しかも、こうした作品や語り物が、中東地域を越えて広く受容されている場合すらあるが、それについても十分な研究がなかった。

そこで、代表的なペルシア語歴史物語である『ハムザ物語』、『王書』、『アレクサンドロス物語』などを取り上げ、ペルシア語歴史物語が、どのように生成し、アジアの各地にどのように伝播し、どのように受容されたかを、学際的に研究し、解明することが必要であると考えた。これらの文学はアラビア語の伝説などを利用しながらペルシア語の作品となり、さらにテュルク系の諸語や南アジア、東南アジアの諸言語に訳され、受容された。19 世紀の国民国家成立以来の○○語文学のような言語別の文学史を越えた存在であり、まさにグローバルな文学としての意義を持つと考えた。

２．研究の目的

『ハムザ物語』『王書』『アレクサンドロス物語』などのペルシア語歴史物語が、どのように生成し、アジアの各地にどのように伝播し、どのように受容されたかを、学際的に研究し、解明するものであった。これらは、イスラーム以前の西アジアの歴史を下敷きにしているが、民衆文学や語り物として、アジア各地の人々に受け入れられ、しかも無名の著者や語り師により、改変や増補が不断に行われてきた。これらの作品が地域や言語を越えて広く受容されたということは、さまざまな地域の人々の間にこれを受け入れる共通の心性が存在したということになる。この共通の心性とさまざまな地域・言語による差違を明らかにするのが本研究の目的であった。

これまで、『王書』や『アレクサンドロス物語』について行われてきた文学研究と歴史学におけるテキスト研究や社会史研究を融合させ、海外の研究者の協力を得つつ、この分野における新たな知見を得ることを目指した。

３．研究の方法

基本的には、歴史学や文学においてオーソドックスな文献学的方法、すなわち、写本や刊本を収集し、それを読解・分析して、テキストの変化を明らかにするという方法をとった。関連する歴史書や歴史物語は膨大であり、写本まで含めればその量はさらに莫大なものとなる。資料は世界各地に散在しており、令和４年度はコロナ禍のため、直接現地に赴くことができず、遠隔で取り寄せられる資料には限界があり、苦労した。令和５年度以降は、イギリス、ドイツ、トルコ、イラン等で写本調査を行うことができた

一方、歴史物語は講釈などオーラルなものとして、伝承され、上演されてきた歴史がある。近年刊行されたトゥーマールなど講釈の台本を収集し、テキストとオーラル・パフォーマンスの関係を考察し、また、伝記集など他の文献に現れる講釈師についての研究を行った。さらに、研究協力者の山本久美子をアメリカ、ロサンジェルスに派遣し、彼の地に在住しているイラン人女性講釈師のパフォーマンスを録画し、インタビューを行った。

海外の研究者との交流も積極的に進め、小規模なワークショップから国際シンポジウムまで開催し、知見を交換した。この研究が世界のなかでトップレベルにあることが、明らかとなった。

４．研究成果

(1) ペルシア語歴史物語がどのように生成してきたかについて、見解が得られた。イスラーム以前のイランを扱った『王書』については、ホダーイナーマグという当時の文献が重視されてきたが、それをつなぐアラビア語文献の存在の重要性が再認識された。『ハムザ物語』についても、登場人物を見ればわかるように、預言者ムハンマドの叔父のハムザや教友アムル・ウマイヤ、イエメンの有力者アムル・ムアッディー・カルブなどのアラブのみならず、アヌーシールヴァーンやボゾルグメフルなどサーサーン朝時代の人物、マハーバーラタで太陽の子であるランデフール、旧約聖書のアブラハムやソロモンなど、さまざまな伝承を利用しながら成立していたことがわかった。主にインドで流行した『ハーティム・ターイー物語』も、イスラーム以前のアラビア半島を舞台としており、物語の流行地と特にかかわらないアラブの過去が利用されることがしばしばあったのである。

(2) 一方、歴史物語が一度成立しても、不断に変化していく例も見られた。『ハムザ物語』の 70

章前後からなるペルシア語古典版は、12 世紀までには成立していたと考えられるが、章の大枠は変化しないものの、文章はその後も少しずつ、より簡易な形に変化して行った。また、その後もさまざまな人物によって増補され、16 世紀頃までにさらに話が付け加わっていた。また、設定もかわったり、他の物語の登場人物が混入したりした。その変化の方向性は、物語がより大衆化していったこと、講釈で語られることで講釈師がそれぞれアレンジを加えていったことによると考えられる。

(3) ペルシア語歴史物語がいかに伝播していったかについても、知見が得られた。第一に、写本がもたらされて、翻訳されたということが当然考えられる。すでに Van Ronkel が示しているように、『ハムザ物語』のマレー語版は比較的忠実にペルシア語古典版を翻訳したものである。しかし、このペルシア語古典版にも写本によって微妙なテキストの揺れが見られ、マレー語版も写本によって同様の揺れが見られることから、一冊の本が伝わって、それが翻訳されて広まったのではなく、複数の本が伝わってそれから複数の翻訳が生まれた可能性がある。この点は、両者のテキストを徹底的に比較することで、結論を出したい。一方、マレー語版の『アレクサンドロス物語』や『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』の場合、原本についていくつかの説があり、跡をたどるのが難しい。これらについては、丁寧なテキストの研究が必要である。

(4) 写本による伝播以外では、講釈師の移動にともなう伝播が考えられる。サファヴィー帝国イスマーイール１世に仕えた『ハムザ物語』の有名な講釈師 Takaltu Khan の息子 Darbar Khan がムガル帝国に移住し、アクバルに仕えた例は有名であるが、それ以外でも出身のわかるムガル帝国の講釈師は基本的にサファヴィー帝国、もしくは中央アジアの出身である。その一人、『ハムザ物語』講釈の指南書である『伝承の飾り』を著した‘Abd al-Nabi Qazvini は、イランからインドに移住した当初は詩人として身を立てることを目指していたがかなわず、自らが幼少から親しんでいた『ハムザ物語』の講釈がインドにおいて歓迎されたのでその道へ進んだという。デカン高原のクトゥブ・シャーヒー朝で『秘密の精髄』という『ハムザ物語』の異本をまとめた著作を著した人物もイラン出身の講釈師であった。オスマン帝国でも、イラン出身者が講釈師として活躍していることから、おおむね講釈師の移住が物語の伝播とかかわっていると考えてよいであろう。　『伝承の飾り』は、『ハムザ物語』の講釈において、イラン式、中央アジア式、インド式、オスマン式の四つの流儀があることを述べ、解説を加えている。『ハムザ物語』講釈自体は近世のムスリム諸帝国で広く見られたものであり、それを支えたのは講釈師の移動であった。

　これに対して韻律のある韻文の『王書』は大きな変化はなかったと考えられるが、近世イスファハーンのコーヒー・ハウスでは『ハムザ物語』同様に王書詠みによって演じられていた。オスマン帝国においても王書詠みの活躍がみられる。しかし、インドにおいては王書詠みの数は少なく、『ハムザ物語』との差がどこにあるのかが不明である。

(5) 受容については東南アジアの事例も興味深い。マレー語版の『ハムザ物語』は比較的ペルシア語古典版から比較的に忠実に翻訳されているようであるが、ジャワ語版は恋物語など独自の物語を多く含み、分量も大幅に増えている。ワヤン・ササクと呼ばれる影絵芝居、ワヤン・ゴレックという木偶人形芝居や中部ジャワの王宮で人が行う芝居でも取り上げられるなど、新たな要素が多く加えられている。一方、『アレクサンドロス物語』は、王統譜にアレクサンドロスが組み入れられるなど、東南アジアの政治構造においても重要な役割を果たした。また、『ムハンマド・ハナフィーヤ物語』は、シーア派第 3 代イマーム・フサインの殉教への復讐というきわめてシーア派的な物語でありながら、宗派とかかわらない形で東南アジアにもたらされている。コンテキストを大きく変えながら、受容された経緯が明らかとなった。

図１ Wayang golek
(アムステルダム人類学博物館蔵)
Wikipedia Commons

(6) パフォーマンスとしては、『王書』の講釈の伝統は現代まで継承されており、本研究では、現役の女性講釈師のパフォーマンスの調査とインタビューも行った。写本調査の過程で、その写本が 19 世紀のバーザールで作成される経緯が記されているものも発見したが、これは当時の写本・読書文化の一端を示すものである。こうした新資料の研究は科学研究費の研究期間内に成果を発表することができなかったが、さらに何らかのかたちで研究を続けていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 近藤　信彰	４．巻 1
２．論文標題 近代イランにおけるテュルク的過去の参照	５．発行年 2023年
３．雑誌名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照	６．最初と最後の頁 107-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山中由里子	４．巻 1
２．論文標題 巨人の名残りー遺物をめぐる中世イスラーム世界の驚異譚と巨人	５．発行年 2023年
３．雑誌名 巨人」の場(トポス) ―古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人表象の変遷	６．最初と最後の頁 115-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuriko Yamanaka	４．巻 1
２．論文標題 How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge between Europe, the Middle East, and China	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Horizons medievaux d ’ Orient et d ’ Occident: Regards croises entre France et Japon	６．最初と最後の頁 169-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kumiko Yamamoto	４．巻 85
２．論文標題 Hamza versus Rustam: Comparing the Hamzanama with the Shahnama	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Bulletin of the School of Oriental and African Studies	６．最初と最後の頁 355-375
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/s0041977x22000787	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大塚　修	4．巻 83-2
2．論文標題 ティムール朝における学芸保護と学知――イスカンダル・スルターンの『傑作集』を中心に――	5．発行年 2023年
3．雑誌名 史苑	6．最初と最後の頁 37-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kumiko Yamamoto	4．巻 1
2．論文標題 Applying the Oral Performance Model to the Longer Barzunama	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Oral Narration in Iranian Cultures	6．最初と最後の頁 39-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.29091/9783752001532	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 近藤　信彰	4．巻 64-2
2．論文標題 16・17 世紀ペルシア語文化圏における講釈と講釈師	5．発行年 2022年
3．雑誌名 オリエント	6．最初と最後の頁 203-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuriko Yamanaka	4．巻 1
2．論文標題 Dynamics of Religious Objects in and outside Museums: How Material Culture of Islam is ‘Framed’ in Japan	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Handling Religious Things : The Material and the Social in Museums	6．最初と最後の頁 183-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17192/es2022.0093	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 亀谷学，大塚修，松本隆志	4．巻 12
2．論文標題 イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注（3）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 人文社会科学論叢	6．最初と最後の頁 69-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hatsuki Aishima, Hayrettin Yucesoy, R. Michael Feener, Osamu Otsuka, Satoshi Ogura, Kenji Kuroda, Hatsuki Aishima, Hilary Kalmbach, Armando Salvatore	4．巻 126
2．論文標題 The Wiley Blackwell History of Islam	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The American Historical Review	6．最初と最後の頁 199-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/ahr/rhab063	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kumiko Yamamoto	4．巻 18
2．論文標題 Naqqali	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Encyclopaedia Iranica Online	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/2330-4804_EIRO_COM_363720	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Osamu Otsuka	4．巻 1
2．論文標題 Zubdat al-tawarih	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Perso-Indica. An Analytical Survey of Persian Works on Indian Learned Traditions	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Osamu Otsuka	4．巻 1
2．論文標題 Jami‘ al-tawarih; (Replacement volume)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Perso-Indica. An Analytical Survey of Persian Works on Indian Learned Traditions	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yumi Sugahara	4．巻 3
2．論文標題 The Balance between Islam and Worldly Politics in the Babad Dipanagara	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia	6．最初と最後の頁 37-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　8件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 Yuriko Yamanaka
2．発表標題 The Fallen Giants: 'Proto-history' of humankind in Arabic and Persian Historical Narratives
3．学会等名 Deutsche Orientalistentag（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Yuriko Yamanaka
2．発表標題 The Epidemiology of Amabie: Prophetic Creatures in Japanese Folklore and Popular Culture
3．学会等名 International Comparative Literature Association Congress 2022（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Interrelations among Various Versions of the Persian Hamzanama
３．学会等名 13th Biennial Iranian Studies Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Changes of the Tale of Hell in Nineteenth-Century Java
３．学会等名 International Workshop "Recenting the Islamic World, Perspectives from Java"（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 Holy persons in the Babad Tanah Jawi
３．学会等名 International Symposium:“Transformation of Religions Reflected in Javanese and Other Texts from Southeast Asia: the Roles and Strategies of States in the Process of Islamization”（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Osamu Otsuka
２．発表標題 Tarikh-i Banakati Reconsidered: Beyond Rashid al-Din-centrism
３．学会等名 International Workshop “Banakati and Khvandamir: Value and Readership of Persian General Histories"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yuriko Yamanaka
２．発表標題 Evolution of the Alexander Romance and its Repurposing in the Islamicate World
３．学会等名 “Alexander Romance: History and Influence on the World Literature”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山中　由里子
２．発表標題 人はなぜモンスターを想像するのか？―認知科学の諸理論と文化バイアス
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山中　由里子
２．発表標題 中世イスラーム的人類史観における巨人族
３．学会等名 連続セミナー「中東と遺産：文化・歴史・信仰の展開」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山本　久美子
２．発表標題 Taraz al-akhbarにみる『ハムザ物語』のパフォーマンス
３．学会等名 イラン研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 菅原　由美
２．発表標題 19 世紀ジャワにおける地獄物語の変容：『髑髏物語』と『天国と地獄に関する詳細な知らせ』の比較から
３．学会等名 東南アジア学会第103回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Hamzanama: The Various Versions
３．学会等名 Association for Iranian Studies, Virtual Converence（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 近藤　信彰
２．発表標題 近世イランにおける講釈とその周辺――『ハムザ物語』を中心に
３．学会等名 日本オリエント学会第62回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大塚　修
２．発表標題 イランにおける普遍史の変貌とイラン人意識
３．学会等名 ICUアジア文化研究所・JFE21世紀財団共催シンポジウム「いま問われるアジア共生の道：アジア歴史研究の視点から（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山中　由里子
２．発表標題 中世イスラーム世界における巨人像―ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民
３．学会等名 日本中世英語英文学会第36回全国大会 企画シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山中　由里子
２．発表標題 中世イスラーム的人類史観における巨人族
３．学会等名 連続セミナー「中東と遺産：文化・歴史・信仰の展開」（第２回）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yumi Sugahara
２．発表標題 What were the Most Important Points for Disseminating the Religion in the Early Period of Islamization in Java ?
３．学会等名 New Directions in the Study of Javanese Literature. Online workshop（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kumiko Yamamoto
２．発表標題 Symbiosis between the Hamzanama and the Shahnama
３．学会等名 Two popular romances in the Persianate Societies（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 神田　惟
２．発表標題 新出のイマーム・ムーサー・カーズィム廟寄進銘及びペルシア語詩銘入り真鍮製燭台について
３．学会等名 公益財団法人 鹿島美術財団 第 27 回鹿島美術財団賞授賞式・研究発表会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 大塚修；赤坂恒明；高木小苗；水上遼；渡部良子	４．発行年 2022年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 516
３．書名 カーシャーニー オルジェイトゥ史―イランのモンゴル政権イル・ハン国の宮廷年代記―	

１．著者名 SUGAHARA, Yumi	４．発行年 2021年
２．出版社 Tokyo: Center for Islamic Studies, Sophia University	５．総ページ数 128
３．書名 Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (6): Paradise and Hell	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大塚　修 (Otsuka Osamu) (00733007)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山中　由里子 (Yamanaka Yuriko) (20251390)	国立民族学博物館・人類文明誌研究部・教授 (64401)	
研究分担者	菅原　由美 (Sugahara Yumi) (80376821)	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授 (14401)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山本　久美子 (Yamamoto Kumiko) (30447320)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員 (12603)	
研究協力者	神田　惟 (Kanda Yui) (20823462)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教 (12603)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 Alexander Romance: History and Influence on the World Literature	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Two popular romances in the Persianate Societies: the Hamza-nama and the Hatam-nama	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 Hamza around the Java Sea	開催年 2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オランダ	ライデン大学			
カナダ	トロント大学			